

かげろうの村

谷 真 介



かいつうの村

谷 真 介





NDC 913

8093-064004-7764

ポプラ社の創作文学 4

かげろうの村

定価 五五〇円

著者 谷 真介

発行 昭和四十六年九月三十日 ©

発行者 久保田忠夫

発行所 株式会社ポプラ社

東京都新宿区須賀町五(二一六〇)

振替東京一四九二七一

印刷 新興印刷製本株式会社

製本 石毛製本株式会社

著者との話しあいにより検印は省略します。
落丁・乱丁本はいつでもおとりかえします。

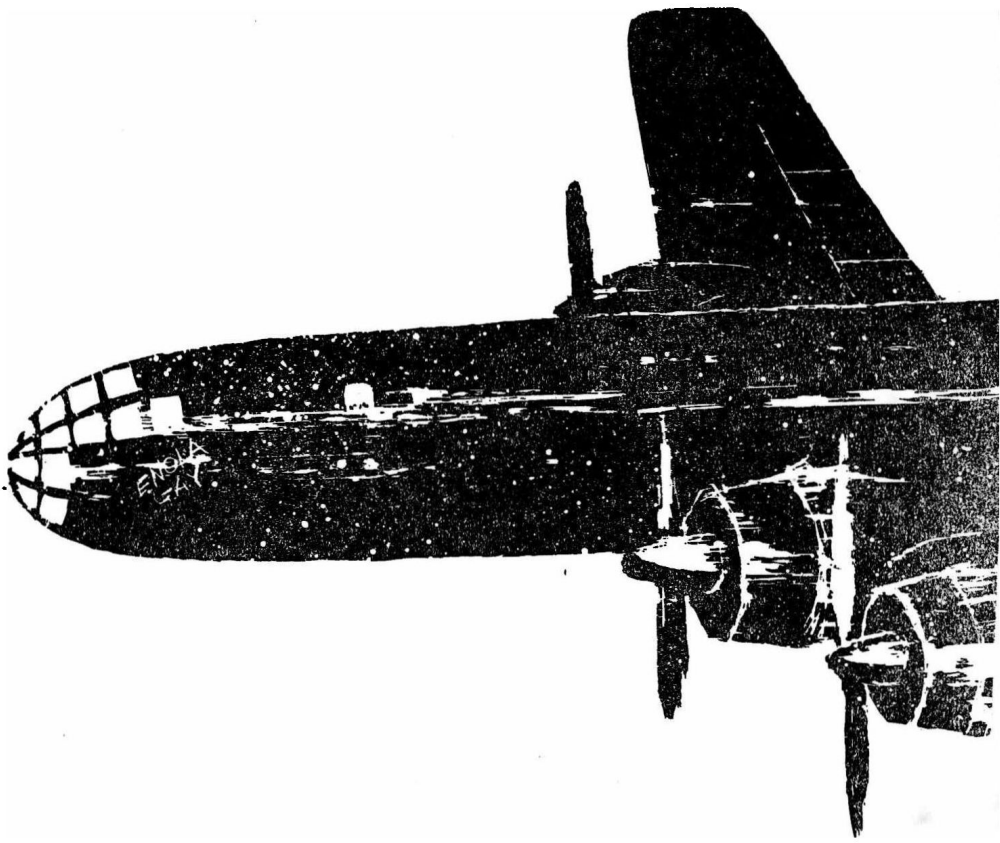
はじめに

「ここ二〇〇〇年の統計^{とうけい}では平和より戦争のほうが長かった。

そのために、私たちはこんどの二〇〇〇年を平和のためにつくさなければならぬと思う。」

チトー大統領のことばより





もくじ

第一章 とどされた川

到着 とちやく 8

夜の底で 19

便所づくり べんじょ 29

青いうずまき 38

トマト事件 じけん 49

第二章 ひもじい日び

秋の流れ 60

林のなかの秘密 ひみつ 69

面会 めんかい 82

ドングリひろい 96

計画中止 けいかくちゅうし 110

第三章 よごれた空

敵機襲来!
120

夜中に消えた
129

仙泉院へ
138

ミツケーのこと
147

寺にきた兵隊
158

東京が燃えている
165

第四章 夏・ふたたび……

竹ヤリ訓練
176

意外な話
185

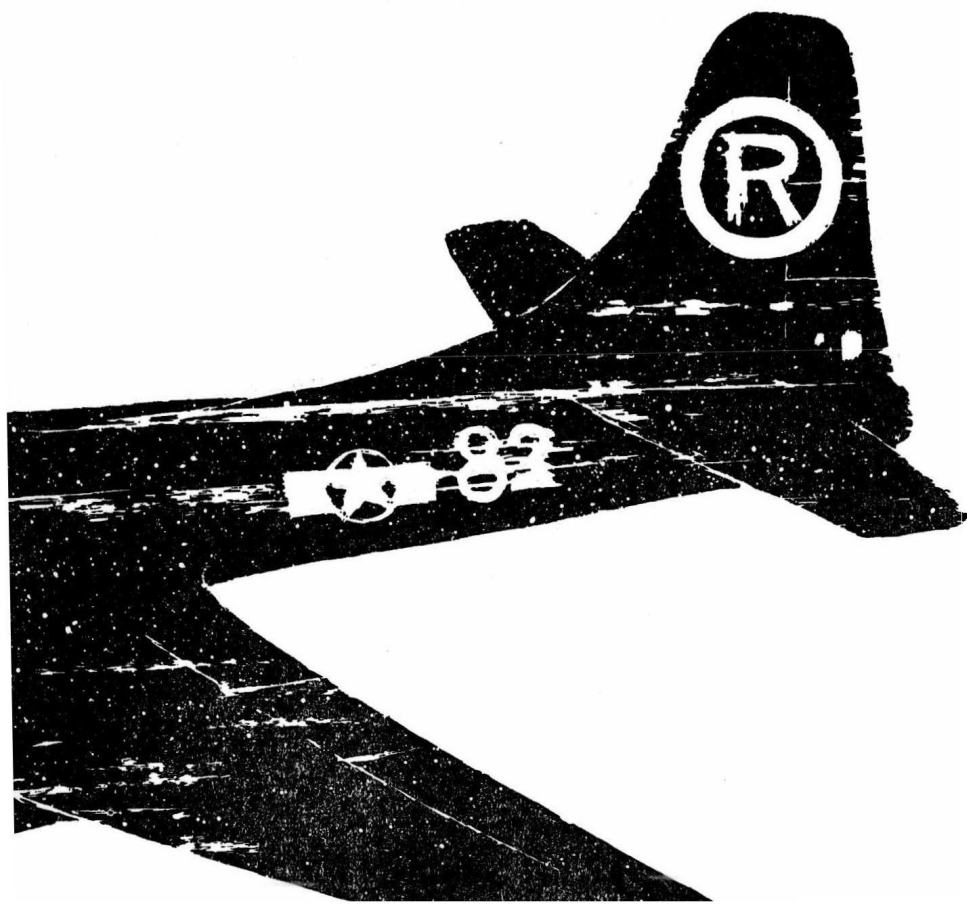
神の声
195

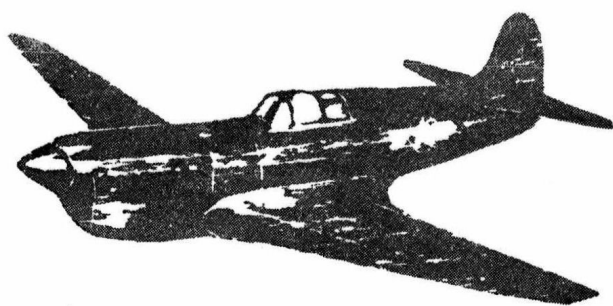
あの男は?……
202

落下傘の話
211

かげろうの道
220

あとがき
226



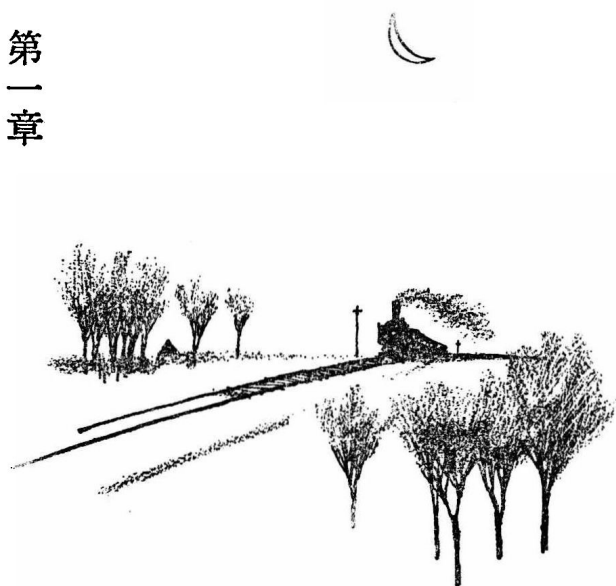


装てい
さしえ 赤坂三好

かげろうの村

谷 真 介

第一章
とざされた川



到着

「小休止。解散！」

木立にかこまれた村のちいさな駅に着くと、列の先頭に立っていた石倉先生が両手をメガホンがわりにして叫んだ。

夏の暑い日だった。

何時間もうだるような汽車にゆられていたので、すいとうのなかはとっくにからっぽになっている。悟は駅に着いたら水が飲みたいと思っていた。

「小休止」の命令が出ると、みんなはいっせいに駅の裏手にある井戸へむかって走っていった。悟もからのすいとうをかかえて走ったが、井戸のまわりにはたちまち人だかりができて、おしくらまんじゅうがはじまった。

「わりこまないでよ。ずるいわよオ。」

「並べ、並べ——」

上級生が声をはりあげると、もみあいのかたまりはやっどほぐれだし、行列がではじめたが、こんどは横から体当たりでわりこむ上級生や、ひとりで三個も四個もすいとうを



あずかって肩^{かた}にかけるものたちがいて、行列^{ぎょうれつ}はなかなか前へ進まない。

「早く飲めよ。のどがカラカラで死んじまうよオ。」

うしろにいるものが声をあげると、またすぐそのうしろから声がかえってくる。

「けっこうだ。早く死んじまえ。おれがかわりにたっぷり飲んでおいでやるよ。」

おこるもの、わらうもの、せきたてるもの、わりこもうとしてはじきとばされるもの——。そうぞうしい声がとびかうなから、さびついたポンプの音がひとときわするどくあたりに響^{ひび}く。悟^{さと}はじぶんの場所をとられないように、前の女子の赤いリュックサックに両手をかけてつかまっていた。

こずえのあいだからギラギラと夏の太陽がきらめいていて、油^{あぶ}が煮えたぎるようにセミがうなっている。悟^{さと}は田舎^{いなか}のセミは鳴き方も大きいと思^{おも}いながら、あたりの黒い樹々^{きぎ}に目を走らせていた。

するととつぜん、うしろのほうで女子の叫^{きけ}び声が聞こえた。

ふりむくと便所^{べんじょ}のなかからとびだしてきた四年生の牛乳屋^{ひきこ}の久子^{ひさこ}が、青い顔をしながら白いうでをびーんとのびして、

「あ、あ、あそこ。へビがいる——」
と、叫^{きけ}んだのだ。

「へびだって!？」

「どこ、どこだよ！」

たちまち三、四人の男子が列をぬけだして走った。

「おい、いってみようぜ！」

「うん。」

つづいてまた五、六人がぬけていく。

「へびだ、へびだ。青い、でっけえへびがいるぞオ。」

六年生のチビの石元^{いしもと}さんが叫^{きけ}びながら、みんなに知らせにむこうへ走っていく。

便所の前に人だかりができて、それがふくらんでいくと、悟^{さとる}はもう気がきではなかった。

——青いへびとは、どんなやつだろう？

ふと行列^{ぎょうれつ}の前方を見ると、かすりのモンペをはいた酒屋^{さかや}のアツ子が立っていた。悟は列をとびだしてアツ子のところへ走っていった。

「ねえ、ちょっとこれに水をいれておいてくれないか？」

悟はたのんだが、アツ子はぶいと横をむいてしまつてとりあつてくれない。

「いいじゃないか。たのむよ。すぐもどってくるからさ——」

悟はすいとうをつきだした。アツ子はうすいくちびるを貝のようにとじたまま、悟に背^{*}

中をむけた。

そのときアツ子の前に並んでいた背の高い上級生が、くるりと悟のほうをふりむいた。悟は一瞬文句をいわれるのかと思ったが、胸に「六年一組 清水」という大きな名札をぬいつけたその上級生は、ソバカスだらけの顔をにこにこさせながら、

「かしなよ。ぼくがいておいてあげるよ。」

と、親切にいつてくれたのだ。

「お願いします。」

悟はすいとうを清水さんに手わたすと、夢中で人だかりのなかへかけこんでいった。

ヘビはぬらぬら青いウロコを輝かせ、便所のすみにへばりつきながら、影のようからだをくねらせて動いていた。

二メートルちかくもある大きなやつだった。

青ヘビはときどき頭をもちあげ、チョロチョロ赤い糸のような舌をだして、みんなの顔をにらんだ。トビ色のまんまるの目玉が、血走っている。

「毒があるかもしれないぞ。用心しろよ。」

「近よるな、近よるなよ。とびつくぞ。」

うしろから声がとんでくる。悟^{さとる}たちは遠まきにしながらヘビリごしでヘビの動きを見守っていた。

そこへ先生といっしょに悟たちをでむかえにきていた村の子たちが、いせいよくとびだしてきた。

「なんでえ。アオデエシヨウだ。毒^{どく}なんか、ねえよオ。」

破れた麦^{あま}わら帽子^{ぼうし}をかぶった村の子はそういうと、みんなの目の前でいきなりしっぽをつかんでヘビをつるしあげた。

「――」

一番前にでていた悟はびっくりして、うしろへのけぞった。

「どけ、どけ、どけ――」

村の子は道のまんなかへヘビを引きずりだしていくと、ハンマー投げのようにびゅんびゅんヘビをふりまわしはじめた。

麦^{あま}わら帽子^{ぼうし}が頭からすっぽぬけて、地面にころがった。

悟^{さとる}は息をのんだ。

ヘビは棒^{ぼう}のようになって、うねりをあげている。

村の子はまるで気がくるったように顔をまっかにしながらヘビをまわしつづけ、じぶん



もぐるぐるまわりながらむこうの木の下まで走っていった。そして、

「やあ！」

かけ声もろとも、ヘビを黒い木の幹みきにたたきつけたのだ。

「ビシッ！」という音がした。

悟さとるはおもわず目をそむけた。すうーっと、からだつめが冷たくなった。

「まだか、こいつ！ 死ね、死ね！」

村の子は目をギロギロ光らせながら、二度三度と同じようにヘビを木の幹にたたきつけると、ようやく気がすんだらしく、そのままヘビを道の上に投げだした。

ヘビはぐったりとのびて、悟たちの目の前にころがった。そして白い腹はらをよじった。

悟たちはいっせいに走りよった。

ヘビはまだ動いていた。口から赤い血をだしながら、びるびるふるえていた。

苦くるしそうだった。

その苦しさをこらえるように、ヘビは長すぎるからだを懸命けんめいにちぢめようとしていた。つーんと、生なつこいにおいが鼻はなをさした。

血のおいだったか、ヘビのおいだったかわからない。だがそのとき、悟さとるはたしかに見たのだ。どろのついたヘビの頭に目玉のないことを。